

## 「鼻」論 —— 孤立した人間への同情の虚実 ——

管美燕  
北台科學技術學院

### 摘要

眾所周知，大正四年初，因家裡的反對，使得芥川的初戀被迫以分手收場。這次的事件，讓芥川看到了人性醜陋的一面，同時也讓他深刻地了解到養父母家對他的強力束縛。然而，芥川雖然為養父母家的束縛所苦，但為了維持家庭的和諧，只得過著與現實妥協的日子。「現代日本的最安全的道路，就是妥協不強求。」（引述自大正四年四月十四日給井川恭的信）。這句話裡隱含著芥川失戀的痛楚與對現實的失望。而其柔弱的性格，應是導致他陷入「個人的孤立」、被迫感受「孤立的寂寞」的根本原因。

在《鼻》的小說世界裡，內供奉自我封鎖在受他人排擠的世界裡，但仍不斷嘗試參與他人的世界，雖然結果依然失敗、受挫，但是在嘗試的過程中，內供奉終於發現了「與生俱來的自己」所具有的本來的價值，只是那個「與生俱來的自己」的價值，是在內供奉與他人的和解失敗、對參與社會感到絕望之下，所被迫認識的價值。也就是說，芥川將自己在現實生活中所遭受到的「個人的孤立」，寄託在內供奉身上來展現。

芥川「個人的孤立」的問題在《鼻》之後依然持續被描寫，除了《孤獨地獄》之外，《芋粥》《毛利老師》等作品中亦可追尋其蹤跡。在這些作品中，描寫的多是在日常生活之中被孤立的個人，不僅不敢反抗，而且殷切期盼與他人的調和共存。現實生活中的芥川，也不斷地追尋可以填補被孤立者「落寞」心情的「愛情」，只是芥川雖然對這樣的人物感到心有戚戚焉，卻終究無法發自內心的喜愛他們。芥川在《鼻》的內供奉以及《芋粥》的五位身上所投射的愛情影像，到了《毛利老師》就只是鏡子裡無法掌握的虛像了。也就是說，芥川雖然多次試圖在作品中尋求「個人的孤立」問題的解決方法，但經由作品與作品的比較對照證明，終究只是虛幻一場。

## 「鼻」論

### —— 孤立した人間への同情の虚実 ——

管美燕

北台科学技術学院

#### 摘 要

大正四年初め、家庭の激しい反対によって、芥川の初恋が破局に終わったことは周知の事実である。その失恋を通して、芥川は人間性に存在する「醜」さをしみじみ味わわされたと同時に、養家による強い束縛も知らされた。しかし、彼は家の絆に苦しみを痛感しながらも、家との親睦を図ろうとして妥協する生活を続けていた。「いい加減な所で妥協してゆくのが現代の日本では一番安全な道だらう」（大正四・四・一四、井川恭宛書簡）という言葉には、芥川が失恋による痛々しさや世俗に対するあきらめが隠れているようである。その性格における弱さが、芥川の「個人の孤立」にまで陥って、「孤立の落莫」を強いられて体得した根本的な原因であろう。

他人から疎外される世界にこもっていて、常に他人への参与を求めようと試みる内供は結局、それに挫折し、失敗したが、試行の過程を通して〈本来の自己〉に生来備える価値を再発見するようになる。ただし、その〈生来の自己〉の認識は、内供が他者との和解に失敗し、社会への融合を断念した境地に陥って、やむを得ず意識したものではないかと思われる。つまり、芥川は自ら体験した自己主張による「個人の孤立」を、内供に託して具現したのではないかと考えられるだろう。

その「個人の孤立」という問題は、「鼻」の後にも描きつづけられ、「孤独地獄」はもちろん、「芋粥」「毛利先生」などもこの延長線にある作品であると認められよう。それらの作品に、社会という日常的世界に孤立する個人が描かれ、そして反逆どころか、他人との調和的な共存しか望んでいない、という対他的处世態度もリアルに表現されている。芥川はそのような人間に対して共鳴を感じながらも、ついに心から愛することができなかった。なぜかという、「鼻」と「芋粥」とに込められた愛情の内実は、「毛利先生」に至って、すべて虚構だっ

たことがわかってくるからである。芥川自身も、孤立した人間の「落莫」を満たしてくれる「愛」を求めずにいられなかった。